

一、養蚕業地域における手作地主と同族集団

—長野県真島村中沢家の一八九〇—一九〇〇年代
の分析を通じて—

福田 はぎの

近代養蚕業の先進地—長野県にあって、ここで分析の対象とする中沢家の居村一帯（川中島附近・旧更級郡）でも、明治前期に既に養蚕業が下層を含む広範な農民間で進展をみた。報告は、その過程が桑栽培や蚕飼いに関わる技術修得を含めた、担い手—農民の商品・貨幣経済への対応を媒介とした点に注目し、その対応の具体的な形態に論及しようとするものである。

商品・貨幣経済への当時の対応は、市場への個々の直接生産者の個別的な対応の結果進展したのではなく、村内指導者を輩出しつつ、これを中心とした一定の「集団的」なそれであった。その場合、養蚕技術発展がまだ民間の摸索状態にある段階で、指導者が生産者の性格を有する地主層に現われた点、従ってまた養蚕普及がこうした地主の存在を媒介にしつつ、当の地主がその他農民とそれまでに結んでいた一定の関係を通じて進展していったという点が看過で

きない。ここで対象とする中沢家がその地主（蚕種業を兼営）の例であり、またこの例によれば当家を中心に明治十年代中沢マキ—同族が改めて集団性を強化（報徳教の導入を契機とした「一心講」の結成）していくという点に注目できるのである。

中沢家と中沢マキとの間には、前者のいわば豪農経営上の利害が後者の意図的集団性強化と結びついていくという関係があった一方、後者の経済的上昇が前者に媒介されるという関係もあった。この二種の関係の境界線は判然とは設け難いが、総体として、農民が市場と結びつつ一定の経済発展をとげていく過程で、そこで同族集団が改めて積極的な位置を与えられ、また機能した、と同時にこうした社会関係を媒介とせざるをえなかったという点が注目される。後に「一心講」は産業組合（県下事実上第一号）の母胎ともなっていく。また養蚕業のみにとどまらず商業的農業の地域的展開（リンゴ栽培。中沢家は郡園芸組合初代副会長。大正期に更級郡はその産額で県内第一位を占める）にも一定の寄与をする。

分析は主として中沢家の私的資料に限定され（村（明治行政村）レベルの資料は未入手）、村落社会の分析事例としては至らない点も多いと思われるが、ご批判ご教示をいただくとすれば幸いである。